

「天竺」という意匠

——御家騒動から国家転覆へ——

永吉雅夫

The Mode of Tenjiku (天竺) in Edo Literature

— especially on Shintoku-maru (身毒丸) & Tenjiku Tokubei (天竺徳兵衛) —

Masao NAGAYOSHI

(一)

見たこともない異国は、どこまで行っても観念の産物である。そこへ行ったとたん、見たこともない異国は見たことのある異国となり、見たこともない異国はそれ自体としてとらえられない。にもかかわらず、人は見たこともない異国を形象したがる。では、見たこともない異国は、「ここ」のどういふ想像力と「ここ」を反射／反映するまなざしとのどのような交錯のうちに形象されてゆくのだろうか。

『和漢三才図会』は「天竺」という呼称をあげたあとに、異称を四つ示している。曰く、「印度、乾毒、身毒、月氏」。そして、「天竺」という表記の由来について唐の学者顔師古の説を紹介する。

按ずるに天竺は西域中の南国なり。顔師古が云はく、身毒の字声転じて天篤と為り、篤字文を省いて竺に作り、又転じて竹の音と為る、と。

これによれば、「身毒」↓「天篤」↓「天竺」という転化がたどられ

ていて、「天竺」とは、ある時「身毒」にとつてかわつた表記だということになる。⁽²⁾

ここで、「身毒」を「しんとく」と仮名書きすれば、と言うまでもなく、われわれは「しんとく丸」の伝承を思い出す。主だった作品だけを数えても、謡曲『弱法師』から説経をへて浄瑠璃に『撰州合邦辻』（菅専助・若竹笛躬。安永二年（一七七三）初演）をうみ、近代にはいつては折口信夫が小説『身毒丸』⁽³⁾を書いた、物語の系譜である。

折口はその小説『身毒丸』の「附言」で「身毒丸の、毒の字は濁音でなく、清音に読んで頂きたい」と述べ、自作を「しんとくまる」と発音するように促している。また、べつに『撰州合邦辻』の、積み重ねられて来た先行芸能の道筋⁽⁴⁾を述べたところは、

古浄瑠璃では名がしんとく丸になってゐるが、しんとくと言ふ語は、天竺を意味する「身毒」と言ふ語があるから、「天竺丸」と言ふ位の意味かも知れない⁽⁴⁾

と記して、この物語の伝承の原姿への関心を示している。実際、自分を「ある伝説の原始様式の語りて」の位置において「高安長者伝説から、宗教倫理の方便風の分子をとり去つて、最原始的な物語にかへして書いたもの」として、その小説『身毒丸』は書かれた。そして、「宗教倫理の方便風の分子」の除去と、「俊徳丸と

いふのは、後の宛て字で、わたしはやつぱりしんとくまるが正しからうと思ひます」（傍点筆者―注）と述べるのとは、おそらく通底してゐるのである。折口は、その名に「天竺丸」という意味を負つた主人公の少年を、「積み重ねられて来た先行芸能」の基層のうちに掘出そうとしているのである。逆にいえば、この伝承の堆積は、それを必要とするほど、物語の表面からは「天竺丸」という痕跡を隠微な揺曳にとどめるよう働いてきたことになる。

人物名をみてみよう。謡曲『弱法師』では、「高安の通俊」と「俊徳丸」である。説経は、天下無双佐渡七太夫正本『せつきやうしんとく丸』（正保五年刊）では、「信吉長者」と「信徳丸」⁽⁵⁾。古浄瑠璃『しんとく丸』⁽⁶⁾では、「のぶよし長者」と「しんとく」。そして、浄瑠璃『撰州合邦辻』では「高安左衛門通俊」と「俊徳丸」になっている。

これらの作品群は、折口によれば、『撰州合邦辻』から説経節までは割と容易に連絡をたどることができるが、「弱法師」と説経節との間には、ひどい懸隔があるやうで、「或は一つの流れから岐れた二つの枝川かとも考へ」られる、という。すなわち『撰州合邦辻』は『弱法師』とおなじ人物名を持つにかかわらず「説経の流」に位置づけられることになるわけだが、では『弱法師』と「説経の流」とのあいだの「懸隔」とは、何だろうか。

『弱法師』は、四天王寺を場とする仏教信仰の論理によって一元的に整理されている、と言つてよいだろう。俊徳丸はすでに、ある人の讒言によつて家を追われ、盲目の乞丐人となつてさま

よっており、追放を後悔した父通俊と再会して、ともに高安へ帰って行く。謡曲は、しかし、ここにドラマを持たない。そこでは、これは前提であり結果であって、ドラマの枠組みを形作っているにすぎない。ドラマは、春の彼岸の中日、四天王寺西門石の鳥居のかたに、目の見えぬ俊徳丸が日想観によって果たす極楽浄土の莊嚴にある。それに対して、ある人の讒言によって家を追われ、盲目の乞丐人となつてさまよっていること、および追放を後悔した父通俊と再会してともに高安へ帰って行くこと、そのこと自体をドラマにしているのが、「説経の流」であろう。誰がどのような理由で讒言するのか。なぜ、家を追われ、盲目となるのか。盲目の身にどのような放浪があるのか。そして、父との再会をふくむ救済と解決はどのようにもたらされるのか。「ひどい懸隔」はそうした点に築かれ、わけても「謡曲の流」には見られず「説経の流」に共通して表現されているのは、継母の呪詛とその結果としての「異例」である。

祈る験しんのあらわれ、その上呪い強ければ、百三十六本の釘の
打ち所とより、人のきらいし異例となり、にわかに両眼つづぶれ、
病者びやうとおなりある

『弱法師』には「げにもこの身は盲目の、足弱車の片端ながら」とあるばかりの部分である。『弱法師』とおなじ人物名を持っているものの『撰州合邦辻』も、やはり「去年霜月住吉で神酒と偽

り、コレ鮑で勧めた酒は秘方の毒酒、癩病発する奇薬の力」の結果「両眼盲めくらいたる」姿をえがく点で、あきらかに「説経の流」に属する。

そして、折口の言う「宗教倫理の方便風な分子」は、こういう部分にこそ胚胎している。説経における救済の具としての「鳥箒」や、同じく『撰州合邦辻』における「鮑の盃」、「寅の年月日刻そろった女の生血」などが、その典型ということになるだろう。そうした「方便や作為」にもかかわらず、しかし折口は「謡曲の流よりも、説経の流の方が」「信じたいと思ふ要素を失はないでゐる」と述べている。具体的に、その「最原始的な物語」として書かれた小説『身毒丸』は、「父及び身毒の身には、先祖から持ち伝へた病気がある」ところの「田楽法師」を描くのである。「蝦蟇の肌のやうな、斑点が、膨れた皮膚に隙間なく現れてゐた」とあるその「病気」は、説経に「人のきらいし異例」とあるのと同じ病気である。伝承の遡及を試みて、田楽を演ずる芸能者の身の上の、折口はその点にこそ「天竺丸」たる所以を見出したということだろう。

そもそもこの物語伝承は『今昔物語』巻四第四話「拘拏羅太子抉眼、依法力得眼語」にさかのぼり、さらにその原拠としては『大唐西域記』が指摘されている。『今昔』の題にうかがえる失明および追放とその後流浪という要素は、継母の邪恋と謀略によるものとしてそれらに備わっているが、しかし説経にいう「人のきらいし異例」をそこに見出すことはない。折口はさきに示した

ように「謡曲の流」よりも「説経の流」のほうに「信じたいと思ふ要素」を認めているが、同時に「但し、謡曲の弱法師といふ表題は、此物語の出自を暗示してゐるもの」とも述べている。前掲「信徳丸」の解説・解題は、『今昔物語』狗孳羅太子の説話が「継母の呪いによって三病（癩病）となり、その結果両眼がつぶれる」というように「変化したのは、説経節が乞食の芸能であったことと関係があるだろう」と述べて、幸若舞の『景清』および『源平盛衰記』の関連個所に「漆を湯に沸かして身に沐び、臍脹して癩人の如くになって」を引用し、「乞丐人（乞食）の間に、いかに癩者が多く、乞丐人といえは癩者をさすぐらいの状態だったのがわかる」と記している。

しんとく丸の「天竺」性は、「身毒」という表記にまつわるコノテーションの関与はともかくも、その身をむしばむ「異例」という形で受け継がれた。むろん、唱導の芸能としての説経において字音が表記に優先することは言うまでもないが、一方、近世という印刷出版の時代にあつて、「身毒」ではなく「江戸時代では、「新徳」「信徳」「真徳」などを当てている」という事実には、文字の選択が、ある忌諱とそれを転倒する慶祝の感覚を物語っているとさえ言えよう。それは、説経の者そのひとと、語りの中に生かされる主人公、その両者に共通する、たとえば異形と放浪とに生を条件づけられた者に対する、人々の両義的な態度、すなわち賤視と聖化の具体的な表現でもある。

(11)

説経における継母の呪詛、また『撰州合法辻』におけるいわゆる玉手御前の恋は、何をもうろんでいたか。

信徳丸生母の没後、後妻に入った「六条殿のおくの姫」はほどなく「若君」を出産する。名づけて「乙の二郎」。「乙」も「二郎」も同じく第二を意味しているから、「乙の二郎」とは家名や家督を相続する者ではないことを示す、念のいった名乗りである。「当御台所」に面白からうはずがない。

たまたま子ひとり儲てに、総領となしもせで、乙の二郎と呼ばすことの腹立ちや。かなわぬまでも信徳を呪い、乙の二郎を総領になすべし

そこで、清水の観世音へ、氏子を信徳に代えて乙の二郎とするから、「信徳が、命を取ってたまわれと、それがさのふてひ、人のきらいし、異例を授けてたまえ」と祈誓して、呪いの釘を打つのである。

『撰州合法辻』はそれを踏まえて、趣向を複雑化した。高安左衛門通俊の「御代継」俊徳丸に対して、次郎丸は「我高安の惣領とは生れながら外戚腹ゆる次男となり。高安の家督は俊徳丸」というので「折もあらば家国を押領せんと工む」人物である。あ

とから生まれた嫡出子のために嗣子の座を奪われた妾腹の年長者として、現在、通俊の妻となって玉手御前と呼ばれる女性は、もと俊徳丸の生母に仕えた「腰元のお辻」で、「次郎丸様も俊徳様も。私が為には同じ継子。義理ある中にかはりはない」という立場の「継母」である。すなわち説経における継母の害意を次郎丸のうえに移した『撰州合法辻』で、では「継母」はどのように振舞うのか。恂拏羅太子に恋慕する王妃による謀略という『今昔物語』「恂拏羅太子扶眼、依法力得眼語」が思い出されることになる。継母の恋とそれを拒絶する継子にしたがって、俊徳丸に対する玉手御前の恋がストーリーを構成する。すでに引用したように、神酒と偽り「妹背の固め」の盃と仕組んだ酒が「毒酒」で、俊徳丸に信徳丸と同じ症状がもたらされる。しかし、信徳丸に義理の仲ではあっても乙の二郎の生みの母であった当御台所に対して、玉手御前には俊徳丸も次郎丸も兩人ともに「同じ継子」であるから、ストーリー上の同じ症状はプロットを異にする。次郎丸は「悪人なれど殺しては」「隔てた中ゆゑ訴人して。殺したかと思はれては世間も立たず。義理も立たず。通俊様もお子の事。何の心よからうぞ」、したがって「継子二人の命をば。わが身一つに引受け」る謀略をめぐらさざるを得ない。恂拏羅太子を王宮に置いては不祥事のもとと遠国へ去らせた阿育王の処置の翻案として、玉手御前は合邦の刃を受けた苦しい息の下で本心を口にすると、

俊徳様。御家督さへお継ぎなくば。次郎丸様の悪、心も自然と

止んで。お命に別条ないと思案を極め。心にもない不義いたづら。(中略)妹背のかためと毒酒をすすめ。難病に苦しめ
たは。お命助けうばかりの方便

であった、と。そして、このモドリの中で打ち明けられるのは、

寅の年寅の月。寅の日寅の刻に誕生したる女の肝の臓の生血
を取り。毒酒を盛ったる器にて。病人に与へる時は。即座に
本復疑ひなし

という、寅の年月日刻そろった出生の自らの命と引き換えにする俊徳丸快気の手立てである。折口は、簡にして要を得た人物把握を次のように示した、いわく「わが子に半意識の恋を覚えて、之を助けるのに命をかける生きがひを知った女、さうして夫への心の贖ひに死を以てする女」と。

当御台所と玉手御前、ふたりの継母はそれぞれに思惑を異にするが、いずれも家督相続という文脈、すなわち御家騒動を演出する女性である。そして一方、信徳丸にしても俊徳丸にしても、彼らはその御家騒動の一方の当事者として役付けられながら、しかし、主観的には、彼らにとってそれは自らの理解を超えた理不尽な状況として立ちあらわれ展開する。そこでは、折口が「しんとくまる」という名にたどろろとした伝承の「最原始的な」姿は、「身毒」という表記を伝承の堆積に沈ませることによって「天竺」

丸」との回路を隠蔽した状態で、物語の表面に「異例」(病氣)として刻印されたのである。

(三)

夫 雅 吉 永

さて、もうひとりの「天竺丸」に話を移そう。言わずと知れた「天竺徳兵衛」が、それである。しんとく丸とは対照的に、こちらはその名に天竺を冠して、「天竺」イメージの前景化が作り出した人物である。歌舞伎脚本として宝暦七年(一七五七)正月初演の並木正三『天竺徳兵衛聞書往来』、それを受けて近松半二らの浄瑠璃として『天竺徳兵衛郷鏡』が宝暦十三年(一七六三)四月初演、そして文化元年(一八〇四)七月に四世鶴屋南北『天竺徳兵衛韓嘶』が初演されて、現在にいたる「天竺徳兵衛」像が固定する。⁽¹³⁾

それをもうひとりの「天竺丸」として、しんとく丸と関連付けて論じるのは奇異に感じられるかもしれない。しかし、いま年齢について見ても、彼らはほぼ同年代である。信徳丸は「十三」の歳に母を亡くし、「第三年」の命日を迎えようという時に、「異例」発して天王寺に捨てられる。俊徳丸は、「廿の上は過ぎざりし」玉手御前の「一つか二つ」年下で、「十七八」とある。そして、天竺徳兵衛は、これは確定できる手がかりに乏しいが、「三ッの年」に母夕浪に別れ、夕浪は「八年以前」に夫吉岡宗観と再会し、徳兵衛は天竺へ「五年以前吹流され」たという「播州

高砂」の船頭である。したがって天竺徳兵衛の年齢は、夕浪が宗観と再会するまでの「夫トの行衛をば、尋ねさまよふうき年月」のカウントによるわけだが、『天竺徳兵衛物語』⁽¹⁴⁾によれば、「大坂上塩町に居住す」る「今は法体して法名を宗心」という、かつて「異名を天竺徳兵衛」と呼ばれた播州高砂の船頭が「天竺へ渡り始申候は、寛永三年丙寅年十月十六日」のこと、「生年十五歳」であった、と書き留められている。

『天竺徳兵衛韓嘶』の初演について記された『歌舞伎年代記』⁽¹⁵⁾の記事を引用する。

月若丸のめのと五百機と、田舎座頭徳都。天竺徳兵衛。実は宗観一子大日丸三やく松助。天ちくへ吹流されし船頭にて。異国のアツシの上の上下を着て出る。(中略)松助万国の咄を申上る事あり。吉岡宗観叶助にて後に切腹して。実は朝鮮の臣下木曾官也。久吉に責亡され、徳兵衛は我子大日丸と物がたりして女房夕浪左十郎にて是も自害す。夫より宗観が首を松助打おとす。捕手大ぜい取巻と松助。めんをむすべば、上より雲下りて隠す。道具替りて樋の口の左右に大勢鎗をまつてゐる。ト樋の口より大きなひき藁。首をくはへて出る。鎗をつきかけると何れももんぜつして倒れる。花道にてひきがあるやぶれて。松助四てんの形にて宗観が首を掲げ高笑ひにて幕。

宗観屋舗の場および同裏手樋の口の場と呼ばれている場面で、舞台に登場した「天ぢくへ吹流されし船頭」がはからずも自身の素姓を教えられて、いっきに「天竺徳兵衛」へと変貌をとげてゆく見せ場である。

小池正胤「いわゆる「天竺徳兵衛」ものについてのノート」¹⁶⁾は、近松半二こそ「異郷」「天竺」に「有効」に意義を与える造型をしたが、南北では「天竺新帰朝者としてのイメージ」はすでに「完全に形骸化され」、「高麗南蛮渡来の妖術というよりも土着化した「怪盗・悪役天竺徳兵衛」となり、「もはや「天竺徳兵衛」そのものですらなくなってしまったのではなからうか」と述べている。が、いまはそうした作品相互における「天竺徳兵衛」一人の虚像の造型」という点の比較はさておいて、正三から半二を経て現在の定型となった天竺徳兵衛という、伝承のトータルな結果について論じようとする。

その観点からすれば、当然ながら、さきの引用部には、正三から半二を経て現在の定型となった天竺徳兵衛の基本要素がそろっている。たとえ人物として「形骸化」「土着化」した悪の張本としての類型に墮すとしても、逆にそのことが結果としての伝承の堆積を示すと言うこともできる。

第一には、天竺帰りの船頭が、実は異国の忠臣の子であること。「聞書往来」は高麗の遺臣正林桂の子とし、「郷鏡」は「韓嘶」と同じく朝鮮の遺臣木曾官の子とする。

第二に、蝦蟇の妖術を伝授され、妖術使いとして活躍すること。

そして、第三に、これは第一の点と関わってくるものとしてあるが、彼らの目的が將軍足利義輝、関白久次、真柴久吉（さらに「音菊天竺徳兵衛」では足利義政）の殺害であり、したがって、これはたんなる家督をめぐる御家騒動の域を越えて、攻め滅ぼされた異国の遺臣の復讐である以上、日本の国家転覆を企図していること。

まず第二の点から考えてみよう。もうひとりの「天竺丸」として、しんとく丸の後裔として天竺徳兵衛を論じようとするのは、さきに挙げた年齢の近似などより、この点に理由がある。すなわち、「蝦蟇」を媒介項とすることで、しんとく丸の「異例」と天竺徳兵衛の「妖術」とは連続するだろう。妖術使いというのも、確かに人としての異例にはかなるまい。蝦蟇はしんとく丸には異例による面相の表現であり、天竺徳兵衛には妖術という異例のシンボルである。

「異例」のあとのしんとく丸の面相については、実はどこにも具体的な表現が見られない。異例は具体的に描写するまでもなく、異例とだけあればこそかえって、「乙姫にてない者が、御身がよくなるいみじき人に抱きつこうぞ」という科白も、聴衆／読者の理解を得ることのできる言葉として、ある、ということになる。

俊徳丸の場合には「鬱悒し」を形容語に選ぶばかりである。しかし、たとえば、歌舞伎で演じられるときの俊徳丸のあの拵えは、どうであろう。紫の鉢巻をむすんで両目を閉じた俊徳丸の、眼を中心にひだり片頬をおおう黒く変色して腫れ上がった皮膚の表現。

そこには、さきに景清に関連して引用した『源平盛衰記』に端的なイメージが持ち伝えられ、それはすでに見たように、さらに折口の小説『身毒丸』にまで及んでいる。

一方、蝦蟇の妖術については、高木元『江戸読本の研究』第三章第三節に「戯作者たちの〈蝦蟇〉——江戸読本の方法」があつて、「中国の蝦蟇仙人は日本で文芸化された途端に、得体の知らない妖術使いの謀反人として形象化された」と、その端緒に「島原の乱を脚色した作品で近松の浄瑠璃『傾城島原蛙合戦』(享保四年)」を挙げている。その「七草四郎の妖術」は、並木正三「聞書往来」に徳兵衛が「七草七郎」と名乗る妖術使いであることの典拠をなしており、天竺徳兵衛ものにおいても蝦蟇の妖術は当初からキリシタンと結びついていた。¹⁷⁾近松半二「郷鏡」での妖術の呪文「はらいそくく」は、「キリシタンバテレンの妖術を連想させる怪異感の象徴」(小池)であり、その怪異感はその人物の背後に広がっている未知の「異郷「天竺」」にささえられて、天竺徳兵衛を「にわかには観客とは異次元に呼吸する人物」すなわち「異人妖術つかい」へと変貌させる、と述べるのが前掲小池論文である。南北では「南無サツタルマグンダリヤ、しゅごせうでん、はらいそくく」と「いっそう無意味の奇怪さに増幅」されている。この異郷性については後述する。

吉岡宗観に伝授される蝦蟇の妖術は、南北(以後)では秘儀化がいちじるしく、

そもがまの仙術といつば、その国の名を得し名鏡名剣に、壬月誕生の男子の血汐を取り、まつた蛙千匹の血汐を合体してこれをひたし所持する時は、いかなる妖術行ふも心のまゝ¹⁸⁾

とされる。しかし、「この妙術うけつぐ上は、頓て日本をくつがへし、修羅の妄執晴らさせます」と「むほんを請つぐ徳兵衛」の「大望」は、成就しない。前掲高木論文は、「天竺徳兵衛の妖術が巳年巳月巳日巳刻に生まれた〈女〉の生血によって破られるという趣向」に「注意」をうながし、『傾城島原蛙合戦』が「伝承的想像力の基盤」のうえに巧みに趣向化したのと同じ「蛇との対立抗争に蝦蟇の妖術が破れるという構想を持つ」こと、また「対置された蛇性は、やはり〈女〉の属性」であることを指摘している。

たしかに「音菊天竺徳兵衛」には、「そもそも蟇の妖術を、くじくには巳の年月日時揃いし女の生血その身にかゝれば忽ちに、妖術消ゆる」とあって、梅津掃部の妻葛城の血が蝦蟇の妖術を無効にする。しかし、「天竺徳兵衛万里入船」¹⁹⁾解説によれば、「韓嘶」の「初演のときの筋書」では「巳の年月日の揃った左京の切腹で、妖術が破れ」るのだし、「天保期」の台本である「万里入船」でも「元トこの尊像は南天竺より渡りし尊体、巳の年月揃ひし男子の血汐をそゞく時は、いかなる寄術も消ゆる」とあって、舟田五郎なる小身の武士の血が天竺徳兵衛の妖術をくじく、ことになっている。必ずしも「〈女〉の生血」には限らないようで、

しかし蛙対蛇という対立図式は共通していて、「壬月誕生の男子の血汐を取り、まつた蛙千匹の血汐を合体」することで獲得される妖術に対抗して、「巳の年月日時揃いし」者の「血汐」が妖術の無効のために必要とされている。

これは、俊徳丸における病気快癒の手だてに共通する論理である。そこでは「寅の年寅の月。寅の日寅の刻に誕生したる女の肝の臓の生血」が、俊徳丸の異例を解毒すなわち無効にするために必要とされたのであった。この設定は先行作品「秀伶人吾妻雛形」(享保十八年(一七三三)七月 並木宗助・丈助)によるもので、「巳」ではなく「寅」ではあるが、生年月日時が十二支のひとつに揃う者の生血が、病気や妖術という異例を無効にするという趣向である。⁽²⁰⁾ 蝦蟇との関連では、たしかに「寅」は「巳」とあるほうが整合するのかもしれないが、「癩」病と虎の組合せは北涼の法盛訳『菩薩投身餓虎起塔因縁経』に見られるし、それは布施行の典拠として知られる摩訶薩埵のいわゆる捨身飼虎の故事⁽²¹⁾にかさなる内容でもあるので、あるいはそれを踏まえた設定なのかもしれない。

(四)

蝦蟇の妖術に関連して、天竺⁽²²⁾徳兵衛に見られる異郷性について少しふれたが、第一の点、天竺帰りの船頭が、実は異国の忠臣の子であるという設定は、二重に徳兵衛を「ここ」の外に位置づけ

る。徳兵衛が語る天竺⁽²³⁾のようす、『天竺⁽²⁴⁾徳兵衛物語』に依拠するそれは、トロンカ嶋―魔迦陀国の竜砂河―ウカインーデビ家体―釈迦堂―釈迦堂町―霊鷲山などの名をあげて説明するが、要するに遠さと大きさによる途方もなさの表現となっている。そんな「ここ」とは違う世界に暮らしてきた徳兵衛、それに重ねるようにその素姓が明かされて、異国の遺臣の子という血筋が自覚されたとき、徳兵衛は決定的に「ここ」の外に出て「天竺⁽²⁵⁾徳兵衛」となる。

そもそも最初に舞台上に登場したとき、徳兵衛は「異国のアツシの上に上下を着て出る」。「徳兵衛、五十日鬢、厚司、大坂手申脚絆、麻上下を着けたる好みの拵え」というのが、現在も踏襲されている演出である。「アツシ」すなわち「厚司」は本来、北海道・東北の山地に自生するニレ科の落葉高木オヒョウの樹皮から採った糸で織った織物、またそれで作ったアイヌの上衣のことである。歌舞伎の衣装としては、たとえば「義経千本桜」の渡海屋銀平のそれが代表的で、船乗りとむすびついて用いられる衣服だが、渡海屋銀平じつは修羅より戻った平知盛であったように、船乗りとか船頭という人種の越境性を「不思議な魅力」と「独特のエネルギーの体現者として形象」するアイテムとなっている。裱をつけるのは領主の家老とか執権職の屋敷に参上するからで、表面の同一化はむしろその下にある地の異人性を強調することになるだろう。

天竺帰りの、アイヌの厚司を着けた船頭が、じつは朝鮮の遺臣

の子であった——こういう人物が、異国の人である父の遺志を受け継ぐとき、第三の点として挙げた「謀反」の質的転換はわかりやすい。

たとえば『和漢三才図会』に示される空間秩序はどのようなものであったか。地理を解説する巻第六十二は、まず「中華」から説きおこし、「華夷一統図」をかかげる。その「明朝万曆年中」に描かれたという図では、画面の右端上方に「朝鮮」があり、その下方に「日本」、そして左のほうに画面の下へ回り込んで「琉球」、中華世界の果てとしての左端に「黄河源」の「星宿海」があり、その下方に「暹羅」が記されている。「中華」各地について記されるのは「大日本国」で、それは今の北海道と南西諸島を除いた「大日本国之図」とともに示される。その後には「朝鮮国」、「琉球国」、「蝦夷島」とつづいて、「西域」および「天竺」と展開するのである。その向こうとして、文章による解説を持たない「北地諸狄之図」「西南諸蛮之図」が置かれる。この配列は、基本的に巻第十三「異国人物」、巻第十四「外夷人物」においても同様で、そこでは無論日本を中華にくりこんだ華夷秩序の中で「震旦」から「阿蘭陀」までの諸地域の人物が絵入りで配置されている。「異国」と「外夷」とは、どちらがうのか。「外夷は横文字を用て中華の文字を識らず、物を食ふにも亦箸を用ひずして手づから摸み食ふ」(原漢文―注)、すなわち漢字と箸の使用の有無によって線引きがなされている。したがって、ここでは「天竺」は「外夷」に分類されているが、地理を説く部分では「異国」に準

じる扱いを受けているのは、「西南諸蛮之図」につづけて「釈迦牟尼佛」および「付法伝統三十三祖」が挿入であることから推測すれば、仏法に対する崇敬の念によるのであろう。

したがって、天竺(徳兵衛が一身以て表現している「朝鮮」「蝦夷島」「天竺」とは、華夷秩序における西・北・南にそれぞれ位置する「異国」のことである。本来、西に位置する「中華」と南に位置する「異国」である「琉球」は、江戸の鎖国体制の中にあっても通交が開かれていた。「朝鮮」については通信使の往来よりも、いわゆる文禄・慶長の役の記憶が利用されたことになる。そして、のこる東には渺茫たる海が広がっている。

気がつけば「ここ」は、これらの外部に取り囲まれることによって周縁が画定され、内なる一体性というようなものは形成されないとしても、取り囲んでいるそれらとは異なる「ここ」として、まるごとの対抗関係に置かれてしまうことになる。しんとく丸の伝承が「天竺丸」との回路を隠蔽する方向をたどったのとは逆に、その後裔としての天竺(徳兵衛の「天竺」イメージを前景化した登場は、そのようにして御家騒動を国家転覆の物語へとみちびく転軸機の役割を果たしたのである。

注

(1) 卷六十四

(2) インドの呼称については、東洋文庫『大東西域記』の注によって、堀謙徳『解説西域記』、杉本直次郎「天竺名中国伝来経路

- 考」(『東南アジア史研究』一)、中村元『インド古代史』上などに詳しいことを知った。ここでは、それらの研究に照らした妥当性を問題にしているのではない。
- (3) 大正三年頃稿、「みずほ」第八号。文庫版全集第十七巻。
- (4) 「玉手御前の恋」。文庫版全集第十八巻。
- (5) 説経テキストは東洋文庫『説経節』(荒木繁・山本吉左右編注)を用いる。
- (6) 近代日本文学大系第二巻『古浄瑠璃及び舞の本集』所収テキストによる。
- (7) 平凡社東洋文庫『説経節』「信徳丸」
- (8) テキストは日本名著全集『浄瑠璃名作集 下』
- (9) 平凡社東洋文庫『説経節』「信徳丸」解説・解題(荒木繁)
- (10) 以下、説経と『撰州合法辻』の主人公をひとくくりにして言うとき、かく「しんとく丸」と表記することとしたい。
- (11) 新潮日本古典集成『説経集』一六五ページの頭注
- (12) 「台邦と新三」昭和二十二年八月「日本演劇」第五巻第五号。文庫版全集第十八巻
- (13) 以下、そういう意味で、とくに断らない限り基本的に『鶴屋南北全集』(三一書房)第一巻所収の「天竺徳兵衛万里入船」、および五代日菊五郎が明治二十四年十二月にその外題で演じて以来踏襲されている「音菊天竺徳兵衛」(『名作歌舞伎全集』第九巻)をテキストにして論じることとする。
- (14) 帝国文庫『漂流奇談全集』石井研堂校訂
- (15) 『名作歌舞伎全集』第九巻 解説(戸板康二)による。
- (16) 「言語と文芸」昭和五十年六月
- (17) 『和漢三才図会』巻六十四の「天竺」の項には、実在の人物としての天竺徳兵衛に関する記事があるが、その前に記されているのは「耶穌法流(俗に云う切死丹)」についての禁制の記事である。
- (18) 『鶴屋南北全集』(三一書房)第一巻所収の「天竺徳兵衛万里入船」
- (19) 『鶴屋南北全集』(三一書房)第一巻
- (20) 日本古典文学大系『文楽浄瑠璃集』は「莠伶人吾妻雛形」による設定を述べる注の補注(四百頁)で、ほかに、並木正三の歌舞伎作品「名古屋織雛鶴錦」では「若殿の病気は生年月日刻の全部を酉で揃った人の血を飲むと本復する」こと、また「三十石燈始」では「亥揃いの人の生肝を父茂次兵衛の白髪と合わせて飲むと、顔面が変じ、亥揃いの生血をねこ柳に合わせて飲むと、元の顔になるといった趣向」があることを挙げている。
- (21) 南方熊楠『十二支考』「虎に関する史話と伝説民俗」
- (22) 「賢愚経 摩訶薩埵以身施虎縁品」に詳しい。
- (23) もっとも「万里入船」では、「徳兵衛、舟頭、好の拵へ、もめんやつし、ちいさき麻上下にて」(傍点引用者一注)とあって、木綿の着物に本性を隠しているという気分が演出されている。
- (24) 平凡社『演劇百科大事典』「厚司」の項参照
- (25) 広末保「藝と幻術と反逆と船頭」(『辺界の悪所』平凡社所収)(二〇〇四年七月)